放課後戦争委員会

一九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後戦争委員会

【Ｎコード】
Ｎ７１２４Ｙ

【作者名】
一九

【あらすじ】
落ちこぼれ生徒の勉強意欲向上と、運動能力低下の生徒の為に試験的に作られた『特別教育機関学業競争十二学区』（略称：教争学区）。この学区内で行われるある特殊な必修科目。それはなんと戦争！？
そんなことはいざ知らず、普通の青春に憧れる落ちこぼれ生徒・月見沢は、そんなデンジャラスな学区の中に属する高校の一つ、若草高校へ入学してしまう。争い事が嫌いな穏健派の月見沢は当初戦争への参加を渋る。しかし月見沢のある隠れた才能を二年生の生徒会

員・鬼灯朱音に見出されてしまい、戦争強硬派の生徒会（別名：放課後戦争委員会）へ強制加入を強いられる。普通に憧れる落ちこぼれ生徒・月見沢はこのかなり変わった高校で憧れの青春の日々を送ることが出来るのか

月を照らす錦灯籠の瞳　（1）（前書き）

月を照らす錦灯籠の瞳　（1）

やばい。迷った。完全に迷った。
復雑に入り組んだ住宅地を抜け、夜道を一人歩く月見沢光一は大きく嘆息した。

―遡ること一時間前。午後十時―

腹が減った。
今朝から僕がやっかいになっている若草高等学校学生寮Ａ棟。その五階にある角部屋、五〇六号室が僕の部屋だ。
鳴り止まない腹の虫。せめて空腹を紛らわそう。一思いに僕は部屋を出て一階の自動販売機を目指した。
「まだ春休み中だからか。他の生徒に出くわさないな」
閑散としている廊下を抜け、小奇麗な学生団欒スペースを横切るとすぐにエレベーターだ。
偶然、エレベーターは五階に留まっていた。
僕はエレベーターに乗り込み、大きく１と表示されているボタンを押すと、ドアは静かに閉まりエレベーターは下降を始めた。

―学生寮Ａ棟一階―

自動販売機は誰かが見ているわけでもないのに、てかてかとランプを無駄に点滅させていた。
僕は硬貨を三枚投入し、家井門（濃い味）の点灯ランプを押した。
家井門はお茶の中では一番美味しい。と思っている僕は『家井門愛好家』だ。
「ぷはっ！いやー生き返る。やっぱりＰＥＴボトルお茶は家井門に

限るね！」
乾ききった喉を潤していると玄関ホールのセキュリティドアが開き、女子学生が二人で話に華を咲かせながら寮に入ってきた。
今朝この寮に入寮してから、人間を見たのは寮長の涌井さん以来だ。本当にここは人が住む場所なのか三度ほど疑ったが、どうやら人は住んでいるようだ。
二人に目を向けると、背丈が小さい小学生のような女子と、黒髪のミドルヘアーの女子が仲睦まじそうに喋っていた。
小さい方の女子が元気いっぱいに口を走らせ、黒髪の女子はそれを微笑ましそうに聞いていた。
なんとも心が和む光景だ。女子高生は非常に癒される生き物である。

ふと黒髪の女子の右手を見ると、コンビニで購入したであろうサンドウィッチやオレンジジュース、オニギリやパンなどが、ぎっしりと入っているビニール袋が吊り下げられていた。
もしや。僕は鳴り止まない腹にグっと力を入れた。
「あの、すみません」
二人は僕の問いかけに気付き会話を中断した。
「はいはい？なにかな？」
小学生のような背丈の女の子が、両手を自分の後ろで組み首を傾げた。
一方、黒髪の女子はムスっとした表情で僕に怪訝の眼差しを向けてきた。
少し怖気付いたが、気に留めずに続ける。
「その、もっているのって夕飯ですよね？」
「うん。そうだケド？」
「ここって学食とかないんですか？」
二人は一瞬キョトンとした後に、黒髪の彼女が一間を開けて口を開いた。
「学食なんか、出ないわよ」

な。なんだってー！てっきり夕食は出るものだと
「そもそも食堂ないし」
小さな彼女がニヤつきながら続いた。
そう言われてみれば、気が付かなかった。
くそぅ涌井さんめ、自分と奥さんのくだらない痴話なんて聞かせてくれなくても良かったから、もっとこう重要な事をご教授願いたかったぜ。
「あのう、大丈夫？」
「大丈夫じゃありません…今朝ここに引っ越してきてバタバタしていたんで、朝からなんにも食べていなくて」
「今朝から？」
「はい」
「もしかして、アンタも新入生？」
「はい、そうです。『アンタも』っていうと？」
僕は黒髪の質問に答えた。
「ふふ、私たちも新入生なんだよー！」
小さい方の女の子が微笑んだ。この二人は同級生だったのか。
「一年三組、風無　巴」
黒髪が無愛想に短く自己紹介をした。
「同じく一年三組！小さな野に花が咲くーって書いて、小野花　咲だよ！よろしくね！えっーと」
「僕は月見沢　光一。よろしく、風無さんに小野花さん」
「咲でいいよ！こーいち君は何組なの？」
文字通り小野花さんは、小さな野に咲いた花のような笑顔を僕に向けた。なんて愛くるしい笑顔なんだ。咲ちゃん、君の笑顔のおかげで今日一日の荷物を運び入れた労も、一瞬で吹っ飛んでしまったぜ。
組か…そういえばどこだったかな。
「えーっと確か――――――」僕は財布の中に入れておいた学生証を確認した。
「あ、三組だ」

偶然。目の前の二人はこれから苦楽を共にし、青春を謳歌するクラスメートだった。
「本当！？じゃあこれから三年間！私たちクラスメートだねっ！」
「ッチ、よろしく」
今、風無さん舌打ちしなかったか？
「う、うん。よろしくね！」

「ふふ、頑張ろうね！勉強も、戦争も」
「え、せんそ――――」

戦争？

僕は一瞬、脳内にインパルス信号を駆け巡らせてから、聞き間違いということにして
「うん！頑張ろう！」と返答した。

「じゃあ、こーいちくん！私たちはこれで」
「あ、うん。そうだ。それじゃあ僕も夕飯を買いに行かないと」
「うふふ、そうだね！じゃあおやすみ！こーいちくん」
「じゃあな」
「うん。おやすみ。咲ちゃん、風無さん」

二人に別れ告げると僕は玄関ホールの自動ドアを開け、颯爽と夜の街に繰り出した。
寮内を振り返ると、咲ちゃんはこちらを見ていて手を振ってくれた。
ああ、可愛い娘だ。

―玄関ホール―

「咲」
「なあに？」
「あいつに今日はもう我慢しろって言ってやった方が良かったんじゃない？」
「あれれ～ともちゃん心配してるのぉ～？」
「なっ！！違っ！」
「うふふっ。冗談冗談！『彼』なら大丈夫♪さ！ご飯食べて、お風呂に早く入っちゃおう？」
「――――――そうね」

月を照らす錦灯籠の瞳　（1）（後書き）

月を照らす錦灯籠の瞳　（2）

二人と別れると僕の腹の虫が再び響き始めた。
よし、コンビニ弁当で夕食を済ませてしまおう。
そう思い立って、今朝引っ越してきたばかりのこの街に繰り出し、コンビニを目指し始めたまではよかったんだ――――――

「やばい。迷った。完全に迷った」

曇天、慣れない街に、暗い夜道。加えて特になんの特徴の無い、見た目が非常に類似している集合住宅やビルや学生寮らしき建物が所狭しと並んでいるのだ。迷うのも無理は無い。

「こんなことならさっきの二人にコンビニまでの行き方を教わっておけばよかった――――――」

―二十分後―

少し大きめの公園を通り、社宅のような建物を過ぎると、やんわりと二四時間営業と書かれた電光看板が見えた。
「や、やっと――――――会いたかった。会いたかったよ――――――」
不慣れな夜の街を徘徊し続け、午後十一時五分。僕はようやくコンビニにたどり着くことが出来た。
感動を胸の奥底にしまいこみ入店する。レジには少し無愛想な若い女性アルバイトが一人、他は客を含め僕以外誰も居なかった。
お目当て惣菜コーナーに向い、少々お高いホイコーロ弁当を選ぶ。

それと家井門を合わせてレジに出した。
「温めますか？」
「お願いします」
温めてもらっている間に、ふと外を見ると僅かだが小雨が降り出していた。
「うーん。これだけ微妙な雨なら傘は要らないか――――――」
温め終わった弁当を受け取り店内を出た。再び寮への帰路を目指し、疲労しきった脚で歩み始める。
「――――――ヘックシッ！！うう、さみぃ」
少量といっても今は四月上旬。微量の風雨に吹かれてた僕の体は暖を求めていた。
「はやいとこ帰って、晩ご飯を食べよう」

コンビニを出て暫くすると、先程の少し大きな公園に差し掛かった。先程は気が付かなかったものの、この公園を横切ってしまえば恐らく、学生寮への近道となるのだ。
だがなんだろう。この胸騒ぎは。なんだかとても危険な香りが漂ってくる。

「ま、もし何かに襲われれば逃げられない程、僕は足が遅くないし大丈夫だろう」
僕は一瞬躊躇をしてから、公園の敷地内に足を踏み入れた。

月を照らす錦灯籠の瞳　（3）

公園に足を踏み入れて二歩目。僕、月見沢光一は早くも後悔していた。

「・・・動くな。動けば、喉仏を切り落とす」
「――――――は、はい」
僕は女性に後ろから手を抑えられ、ククリナイフの刃部分を首元に突きつけられていた。
おいおい冗談だろ。ここ日本国にはテロリストなんていうテレビの中でしか見たことがない、物騒な生き物が存命していたのか。てゆうか胸が当たってるんですけど・・・

おっといかんいかん。こんな状況下なのに横島な気持ちになるなんて。しっかり捕まっていないと。
「おい、こいつ腕輪をつけていないぞ」
後ろから男の声がした。腕輪？なんのことだ？
「なに――――？本当だ。おいお前、若草高校の学生だろ」
「は、はい」
僕を拘束している女は自分の腕に付いている腕輪を見せてきた。
なにか刻印されているぞ。これは、萩の花？
「これはどこだ？」
「ナ、ナンノコトデスカ？（――――柔らかい）」
「とぼけるな。刺すぞ」
「ひ、ひょぇぇぇぇぇぇ」
「おい、こいつ。ひょっとして新入生なんじゃないか？」
今度は後ろから別の男の声がした。
「なに？――――――おいお前」

「は、はい！なんでしょうか！？」
「お前、新入生か」
「は、はい」
「証拠は？」
しょ、証拠って言ったってなあ――――――そうだ。
「が、学生証が」
「どこだ」
僕は地面に落ちている鞄を指で刺した。
「おい」
僕を抑えている女が一声掛けると、後ろで待機していた金髪の男が僕の足元にある鞄の中を漁り始めた。

（今まで死角に居たから見えなかったけど、この人が着ているのって、学生服か？だとしたらこの人達は学生？）
金髪が暫く、無言で学生証を探していると。
「おい。まだか」
「ちょっと待て――――――おお、あったぞ」
男は財布の中から学生証を見つけて女に見せた。
「――ふん。嘘はついていないようだな」
「は、はい。じゃ、じゃあ逃がしてくださ」
「ダメだ」
「そんなぁ」
「丁度良い。個人的な恨みは無いが、若草高校生徒のお前には見せしめになってもらおう。我々に刃を向けることがどれほど恐ろしいことか、貴様等若草高校の生徒会に分からせるためにな」

「ッ！！！？？」

女が言い終わると同時に腹部に強烈な衝撃が走った。
先程の鞄をあさっていた金髪が、僕のみぞおちに一撃お見舞いして

きたのだ。
「ッッ！」
腹を抱え込むと後ろに居た髭面の男が、メリケンサック付きの拳で頬を殴ってきた。
「ブヘッ！！」
口内が切れ、血しぶきが飛ぶ。血しぶきとは案外綺麗に飛ぶものなんだな。
「オラッ！」
今度は別の男に、頭部への強烈な踵落としをされた。
「がはっ！！！」
頭部に強い衝撃を喰らった僕は当然、意識が朦朧としてきた。
ああ、なんでこんな目に僕が遭わなくちゃならないんだ。それもこれも受験戦争に失敗して、入学金の安さに釣られて、こんなわけの分からない街に来たのが行けなかったんだ。
徐々に飛びつつある意識で、僕は猛烈に後悔の念を抱いていた。

その時である。

夜の街に鋭い銃声が二発。静かに響きわたり、僕をリンチしていた金髪と髭面が地面に倒れこんだ。

「な、なにが――――？」

顔を上げると先程まで空覆っていた錆鉄御納戸色の雲はいつの間にか散り渡り、穴の開いた藍碧色の天空からは壮麗な月光が、薄明光線の如く滑り台の上に居る人物を照らし輝かせていた。
「て、てめえ！なにもんだ！？」
そう。それはまるで子供の頃にテレビの中で輝いて見えていたヒー

ローのような――――――――ヒーローのような――――

女子――――高生？

月光が滑り台の上にいる人物を完全に照らすと、それは軽機関銃を持った銀髪の女子高生だということが判明した。

「鬼灯　朱音だ」

そう短く呟くと、すべり台の上の女子高生は手に持っているライフルの銃口を僕の後ろにいる女に向けた。

「なっ！？『月照らしの鬼火』がなぜここに！？」

「答える義理は無い。お前は我々が拘束する」

「ふん！抜かせ！こっちには人質が居るんだ！」

そう言いながら、女は地べたに寝転んでいる僕の首元に再びナイフを突きつけた。

「う、うわぁぁぁ。た、たすけてぇ」

「――――――ッ」

滑り台の上の女子高生は静かに銃を下げ、唇を噛んだ。

「ほら立て！」

「は、はい」

まずい。このままでは折角助けてもらったのに、ダサすぎる。

「あっはっはっはっは！！！そうだ！お前はそのまま動くな――――」

言い終わると同時に、女は後方からの強烈な斬撃攻撃を緊急回避した。

見る大男が大きな剣を地面に突き刺していた。

「ッ！！もう一人居やがったのか！！」

女は回避と同時に僕から離れ、僕は久しぶりに自由の身となった。

「――――――動くな」

銀髪の女子高生は、滑り台の上から再び女に銃を向けた。
「動くと撃つ」
「――――――ッチィ！！」
「え、煙幕！？」
女は仕込んでいた煙幕を地面に叩きつけた。
「っく！」
辺りは青白い煙に包まれ、視界は完全に奪われてしまった。
「広瀬先輩！新入生を！」
「ああ！」
「うわっ！ちょっ！！」
銀髪の女子高生が叫ぶと、僕は大剣を持った大柄の男に担がれた。

暫く男の肩の上で大人しく担がれていると、やがて煙は晴れ渡り辺りの視界は良好となった。
「――――――撒かれましたね」
「うむ」
「うげぇっ！」
女子高生に続いて、男が小さく頷きながら肩に乗せていた僕を地面に落とした。
「いててて、あれ？」
ナイフの女と、さっきまで地面に倒れていた筈の金髪と髭面が消えてる――――？
「鬼灯。俺は奴らを追撃してから帰還する」
「はい。お気をつけて」
「うむ」
そう言うと大柄な男は、足早にで何処かへ走っていってしまった。

「さて――――――おい、大丈夫か？」
銀髪の女子高生は滑り台を颯爽と滑り降りて来た。

いや、そこはカッコよく飛び降りろよ。
そういえばこの人、あの大きな銃はどこにしまったんだろう？
「い、てててて。大丈夫じゃないです…」
「だろうな。ほら、手を貸せ」
だろうなって…
「あ、ありがとうございます」
手を借りて起き上がり、改めて見て見ると銀髪の女子高生は、かなり淡麗な顔立ちだということが分かった。
はっきり言って美人だ。
「あ、ありがとうございます」
「何故二度言う」
「い、いや、その――――」
「ふっ。申し遅れた。私は若草高校生徒会員二年生の鬼灯朱音だ。よろしくな」
「あの、えっと。ししし新入生の月見――――」
名前を言いかけた僕の言葉を遮って先輩が口を開く。
「月見沢　光一」
「えっ？なんで僕の名前を…？」
「ん」
鬼灯先輩は地面に落ちている僕の学生証を指さした。

……ああ、なるほど

「よろしくな。月見沢」
「よろしくお願いします。ってかさっきのは一体何だったんですか！？」
「あれか、あれはな――――――――――――――――――――――――――――」

「……え」

――――――――――そう、この会話こそ。僕が最悪で、最低で、最高な高校生活を送ることの切欠となってしまった。先輩との最初の会話だった。

特別教育機関学業競争十二学区　（1）

入学式

紅白の幕が広がる大講堂。その最前に位置する壇上の真ん中で、凛々しい銀髪の生徒委員は新入生に向けて祝辞を述べていた。
（かっこいい先輩だねー！）（脚、超綺麗じゃね？）
周囲の一年生が囁いているのが聞こえる。

恐らくこの人達も憧れの高校生活に希望を抱きながら、（新教育法とやらが実施される学費が極端に安い）この学校の門を叩いたに違いない。
しかしこれからあの銀髪が話すこの学校の。いや、この学区街の在り方とその教育法を聞けば、半分以上の生徒が高校選択の後悔するに違いない。
実際、僕は早くこの学校を卒業したいと思っている。

三日前

「よろしくお願いします。鬼灯先輩。というか、さっきのは一体何だったのですか？」
僕は身体に付いている砂を払いながら先輩に尋ねた。
「あれか、あれはな隠密隊。と言ったところかな？」
僕は思考を働かせ、（ああ比喩表現かなにかか）と受け止めた。
最近の高校生の流行の遊びの一種だろうか。それとも演劇の練習？
「そうなんですか。でも凄い迫力でしたね。先輩、本当にあの女の人を撃ち殺すかと思いましたよ」
「なにを言っている？本当に殺すつもりだったんだぞ？」

「――――――はい？いまなんて？」
「だから本当に銃殺するつもりだったと言ったんだ。聞こえなかったんか？」
「えっえっ？」
「あいつを倒せば、高校通算で五十八人目だったな。一緒に居た男二人はアレで死んだだろうし」
可愛い顔してこの娘は何を言ってるんだ。
「そ、それって合法的不味いですよね？先輩捕まらないんですか？」
この人はヤバイ。そう思って後ずさりをしながら質問を続ける。
「――――ふむ。君はまだ新入生だからこの制度を知らないのか」
先輩はすぐ後ろにある小高い丘に位置する建物を指さした。
よく見るとそれは先程まで僕が居た若草高校学生寮だった。こんなに近かったのかよ。
「ここで立ちながら話すのも難だ。雨も降りそうだし、学生寮に戻って説明してやろう」
「は、はい」
そう答えると僕は前を歩く先輩の後をおずおずと着いて行った。

特別教育機関学業競争十二学区　（2）

僕たちが学生寮に帰寮すると同時に、重苦しい曇天が大量の水分を地上に撒き散らし始めた。
寮の中には先程とは異なり、ちらほらと数人の生徒の姿が見えた。

―若草高校学生寮Ａ　二階生徒談話室―

「簡単に説明するとこの学区の学業方針は、生徒個人の偏差値の数値に伴い武器を配給し、それを用いさせ学校間の戦争を行わせる。そして学区内の十二校の学校による戦争を勝ち抜かせること――――生徒同士に殺し合いをさせる。と言ったところか」

「――――――――」
まるで教師が数学の方程式を生徒に教えるかの如く、淡々と当たり前のように先輩から発せられた言葉に僕は絶句した。
文字通り句を絶った。殺し合い？冗談だろ？
法に全くと言っていいほど興を唆られない僕でさえ、憲法第九条と刑法一九九条くらいは把握している。
先輩の簡単な説明によるところ、その二つがこの学区内では犯されているらしい。ここは無法の地帯なのか。

「う、うそですよね？だって、そんなことしたら――――」
「大丈夫だ。この学区内の殺人は殺人罪にはならない。合法だ」
僕の言葉を断ち切り、先輩は二人掛け用のソファから立ち上がった。
雨が激しく体当たりをする窓ガラスに向かい、宵闇に映る自分を見つめながら話しを続ける。
「月見沢。お前、戦争で人を殺めた人間をいちいち『憲法違反だ』と言って捕縛するのか？」

「えっ、いや。それとこれとは」
「では何が違う。この学校では戦争が勧められている。戦争は愚かだ。滑稽だ。国頭の我侭だ。最も原始的かつ暴力的な紛争解決手段だ」
「じゃあなんでそんなことを」

「それは人が死ぬ戦争の場合だがな」
「えっ――――？」
人が死なない戦争？そんなものあるものか。戦争とは国による定義は違えど、人が人を動かす戦争は必ず人は死ぬ。
我々日本人の多くはまだ文献でしか見たことがないが、それは愚かで儚い軍事措置だという事を僕は重々承知している。
「人の死なない戦争なんて――――――――」
「お前も経験をして、恐らく敗れてここに来たのだろう？」
先輩は鉛筆を器用に指先だけで遊ばしていた。
「あ。――――――――――――」
あった。それこそ転義法、比喩表現だ。僕は高望みをして届かなかった結果が今に至るのだ。
「受験――――戦争――――？」
先輩はふっと鼻を鳴らすと、やっと気がついたか。という顔になった。
しかし受験戦争がなぜ、殺人を犯していいことに繋がるのか？
「でっでも、人を殺めて良いなんて、どういうことなんですか？」
「大丈夫だ。奴らは死んだが、正確には死んではいない」
「は？」
「奴らの腕には、こんな輪っかが付いていなかったか？」
先輩は僕に背を向けながら後ろに踵を上げ、自分の足首を見せた。
「これを見ろ」
「この輪っかがどうかし――――――わぁぁぁぁぁぁぁ！！」
踵を上げ、輪っかを見せてきた先輩のその短いスカートからは、至

宝の布地が露になろうとしていた。が、残念。こういう時は見えそうで必ず見えないものだ。
それにしてもこの輪っか。覚えている。この輪っかは多少色が異なるものの、僕を捕らえていた女が腕に付けていたものと恐らく同じだ。
「これって、さっきの女の人も付けていました。これが一体なんなのですか？」
「これはな――――『学生証』だ」
「が、学生証！？」

特別教育機関学業競争十二学区　（3）

「学生証って――――？」
「なんだお前。学生証を知らないのか。学生証とは生徒が――――」
「いや、わかってますよ。なんていうか。変わった形？ですね」
「そうかもな。これは最先端の科学技術が搭載されている代物らしくてな。私は機械に弱いので上手く説明出来ないのだが――――――」

先輩の説明によると、なんでもこれがあることによって戦争による武器が支給され、その武器による学生証保持者に対する攻撃は多少の痛覚は伴うものの、本当に死ぬことはない。らしい。
はっきり言おう。ちんぷんかんぷんだ。

「えっと、よくわからないんですけど」
「ふむならば実際に見せてやろう」
そう言うと先輩は学生証が付いた右足の爪先を床に軽く叩いてみせた。

するとどうだろう。先輩の足元に結界のようなものが現れ、そこから先程見たライフル銃が出現した。
全長は百二十ｃｍ程だろうか。見るからに重々しく、近くで見るとこれほどまでに禍々しい代物だったのか。と舌を巻いてしまう。
「よっと」
先輩はそれを軽々しく持ち上げて銃口を僕の方へ向けた。
「う、うわあ」
腰が向けてしまう。先輩はそんな僕を見て少し笑うと
「心配するな。撃たない。それに撃っても今のお前には当たらん」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7124y/

放課後戦争委員会

2011年12月11日07時49分発行